日本民話「化け物寺」の由来
―中国の源泉と日本への流入―

鈴木　滿

〔一〕

先ずは中国の書籍所載の物語から。

東晋（三一七―四二〇）の干宝編撰[1]と言われる古今の怪異非常を語った紀元四世紀の『搜神記[2]』全二十巻は中国後代の稗史小説および民間伝承に多大な影響を与えたが[3]、日本にも舶載されて同様の形で伝播した痕跡が少なくない[4]。

たとえば、こんな話はどうだろう。なお〔　　〕内は論者の補足である（以下同様）。

先ず原文[5]を掲げる〔旧字は新字に改めた〕。巻十八にある。題すれば「細腰」か。

魏郡張奮者，家本巨富，忽衰老財散，遂売宅与程応。応入居，挙家病疾，転売隣人何文。文先独持大刀，暮入北堂中梁上。至三更竟，忽有一人，長丈余，高冠黄衣，升堂，呼曰：「細腰。」細腰応諾，曰：「舎中何以有生人気？」答曰：「無之。」便去。須臾，有矣一高冠青衣者：次之，又有高冠白衣者。問答并如前。及将暁，文乃下堂中，如向法呼之，問曰：「黄衣者為誰？」曰：「金也。在堂西壁下。」「青衣者為誰？」曰：「銭也。在堂前井辺五歩。」「白衣者為誰？」曰：「銀也。在牆東北角柱下。」「汝復為誰？」曰：「我，杵也，今在竈下。」及暁，文按次掘之，得金銀五百斤，銭千万貫，仍取杵焚之。由此大富，宅遂清寧。

次に読み下し文にしてみる〔句読点はいくらか読み易く改めた〕。

魏郡の張奮は、家本巨富なれども、忽ち衰老し財散じ、遂に宅を売りて程応に与う。応入居するに、家を挙げて病疾し、隣人の何文に転売す。文先に独り大刀を持ちて、暮に北堂中に入り梁に上る。三更の竟りに至り、忽ち一人有り。長丈余、高冠黄衣、堂に升り、呼びて曰く「細腰」と。細腰応諾す。曰く「舎中何ぞ以て生人の気の有るや」と。答えて曰く「之無し」と。便ち去る。須臾にして有り、一高冠青衣の者。之に次ぎて、又高冠白衣の者有り。問答并びに前の如し。将に暁にならんとするに及び、文乃ち堂中に下り、向の法の如く之を呼び、問いて曰く「黄衣の者は誰と為すや」と。曰く「金なり。堂西の壁下に在り」と。「青衣の者は誰と為すや」と。曰く「銭なり。堂前の井辺五歩に在り」と。「白衣の者は誰と為すや」と。曰く「銀なり。牆の東北角の柱下に在り」と。「汝は復誰と為すや」と。曰く「我は杵なり。今竈下に在り」と。暁に及び、文按次して之を掘るに、金銀五百斤、銭千万貫を得たり。仍ち杵を取りて之を焚く。此れに由りて大いに富み、宅は遂に清寧なり。

最後に現代語訳[6]を試みる。

魏郡[7]の張奮は、もともと大層な財産家だったが、急に衰窮して破産した。そこでとうとう居宅を程応に売却した。応が引越したところ、一家中が病気になってしまったので、隣人の何文（かぶん）に転売した。文はまず独りで大刀を持ち、日暮れがたに北堂[8]の中に入り、梁（はり）に上（のぼ）った。三更が果てる頃[9]、突然ある者が現れた。背丈は一丈[10]余り、高い冠を被り黄の衣を纏っているのが、庭から座敷に上がって来て、「細腰よ」とだれかを呼び立てた。細腰が返事をした。黄衣の者が言うには「家の中にどうして生きた人間のいる気配があるのだ」。細腰が答えて言うには「そんなのはおりません」。すると立ち去った。暫くして、一人の高い冠を被り青い衣を纏っているのが次にやって来た。また高い冠を被って白い衣を纏ったのも来た。問いも答えも共に最初と同じだった〔このように省略されているが、民間伝承の語り口としては、最初と全く同じ反復がなされ、合計三度の問答があるはずで、そうでなくては落ち着きが悪い〕。明け方になろうとする頃〔しかし、まだ暗いので妖怪変化は活動している。「細腰」も返答できる状態にあるわけ〕、文は堂に下り、これまでのやり方に従って訊ねて言った。「黄の衣の者は何だ」。答えていわく「黄金〔の精〕です。堂の西の壁の下にあります」。「青い衣の者は何だ」。「青い銅銭〔銅銭は青く錆びる〕〔の精〕です。堂の前の井戸の辺り、五歩の所にあります」。「白い衣の者は何だ」。「白銀〔の精〕です。牆（へい）の東北の角の柱の下にあります」。「さておまえはいったい何だ」。「わたしは杵[11]〔の精〕です。今竈（かまど）の下におります」。夜が明けて〔つまり妖怪変化の活動時間が終了してから〕、文が順番に発掘すると、金銀五百斤[12]、銭千万貫[13]を得た。それから杵を取って燃やしてしまった。こうして大いに富み、居宅は結局平穏無事だった。

これは、最初金銀および銅銭の精が、彼らとしてはおそらく危害を加える意図は無かったのに、そのいわゆる

「気」が天然自然に転宅者一家に悪い影響を及ぼした次第だが、病気にしてしまった程度で、幸い死者が出ぬうち、新たな入手者が賢明に進退したため、めでたし、めでたし、に終わっている。多分、金銀および銅銭としても世に出て用いられたかったのであろう。ただし、ここに哀れを留めたのは片手杵の「細腰」で、留守居役として奉仕した挙句、器物の精怪は不祥である、とばかり人間によって火刑に処された。さぞかし不本意であったろう、と推察する。

次に紹介するのは、同じく巻十八にある、同工異曲ではあるがもっと怖い話。

これは宋の李昉撰『太平広記』五百巻巻四百三十九畜獣六の「豕（いのこ）」の部に「安陽書生」として収録されている。

まず原文を掲げる。

安陽城南有一亭，夜不可宿，宿輒殺人。書生明術数，乃過宿之，亭民曰：「此不可宿。前後宿此，未有活者。」書生曰：「無苦也。吾自能諧。」遂住廨舎。乃端坐誦書，良久乃休。夜半後，有一人，著皁単衣，来往戸外，呼亭主。亭主応諾。「見亭中有人耶？」答曰：「向者有一書生，在此読書。適休。似未寝。」乃暗嗟而去。須臾，復有一人，冠赤幘者，呼亭主。問答如前。復暗嗟而去。既去寂然。書生知無来者，即起詣向者呼処，効呼亭主。亭主亦応諾。復云：「亭中有人耶？」亭主答如前。乃問曰：「向黒衣来者誰？」曰：「北舎母猪也。」又曰：「冠赤幘来者誰？」曰：「西舎雄鶏父也。」曰：「汝復誰耶？」曰：「我是老蠍也。」於是書生密便誦書至明，不敢寐。天明，亭民来視，驚曰：「君何得独活？」書生曰：「促索剣来。吾与卿取魅。」乃握剣至昨夜応処，果得老蠍，大如琵琶，毒長数尺。西舎得老雄鶏父，北舎得老母猪。凡殺三物，亭毒遂静，永無災横。

読み下し文。

安陽の城南に一亭有り。夜宿すべからず。宿さば輒ち人を殺す。書生の術数に明らかなるあり。乃ち過りて之に宿す。亭民の曰く「此宿すべからず。前後此に宿して、未だ活くる者無し」と。書生の曰く「苦無きなり。吾自ら能く諸す」と。遂に廨舎に住む。乃ち端坐して書を誦し、良久にして乃ち休む。夜半の後、一人有り。皁き単衣を著け、戸外に来往し、亭主と呼ぶ。亭主応諾す。「亭中人有るを見るや」と。答えて曰く「向に一書生有り。此れに在りて書を読めり。適休む。未だ寝ねざるに似たり」と。乃ち暗嗟して去る。須臾にして、復一人有り。赤幘を冠する者の亭主と呼ぶ。問答前の如し。復暗嗟して去る。既に去りて寂然たり。書生来たる者の無きを知り、即ち起ちて向に呼ぶ処に詣り、効いて亭主と呼ぶ。亭主亦応諾す。復云わく「亭中人有りや」と。亭主前の如く答う。乃ち問いて曰く「向に黒衣にして来れるは誰ぞ」と。曰く「北舎の母猪なり」と。又曰く「赤幘を冠して来れるは誰ぞ」曰く「西舎の雄鶏父なり」と。曰く「汝は復誰なるや」と。曰く「我は是れ老蠍なり」と。是に於いて書生密かに便ち書を誦し明に至り、敢て寐ねず。天明、亭民来たり視て、驚きて曰く「君何すれぞ独り活くるを得たるや」と。書生曰く「促やかに剣を索め来たれ。吾卿と魅を取らん」と。乃ち剣を握り昨夜の応える処に至れば、果して老蠍を得たり。大いさ琵琶の如く、毒長数尺。西舎に老雄鶏父を得、北舎に老母猪を得たり。凡せて三物を殺すに、亭毒遂に静まり、永く災横無し。

現代語訳はこうもあろうか。

安陽の城の南に一つの駅館[15]があった。夜は宿ることができない。宿ればその人は死ぬのである。書生[16]で術数の道[17]に

長けているのがいた。この町にやって来て、ここに宿を取った。駅館の吏員が言った。「ここにお泊りになってはいけませぬ。このところここにお泊りになって、生きていたかたはおられませぬ」。書生が言うよう「一向かまわない。わたしはちゃんとうまくやってのけられる」。そしてとうとう官舎に泊り込んだ。さて書生はきちんと座って、本を朗誦していたが、暫くして止めた。真夜中が過ぎた時、ある者がやって来た。黒い単衣(ひとえ)[18]を着ており、建物の外に来て、亭主[19]、と呼んだ。亭主〔元より人間では無い〕が「はい」と返事をした。「駅館の中に人間がいるのを見たか」と訊く。答えて言うには「さっき一人の書生がおりました。ここにいて本を読んでおりました。今たまたま読むのを止めております。どうもまだ寝ていないようです」。するとそやつは嘆息して立ち去った。暫くしてまた一人、赤い頭巾を被った者[20]がやって来て、亭主、と呼んだ。問答は前と同様〔民間伝承の語り口では、煩を厭わず、同じ科白をきちんと反復するのだが〕。そやつもまた嘆息して立ち去った。立ち去ったあとはひっそりした。書生は、もう来る者が無い、と知り、すぐに立ち上がって前の者が声を掛けた場所に行き、真似をして、亭主、と呼んだ。亭主がやはり「はい」と答えた。また言うには「駅館の中に人間がいるか」。亭主は前と同様に答えた。そこで訊くには「さっき黒い衣を纏って来たのは何だ」。いわく「北の家のおっかさん豚です」。また訊いて「赤い頭巾を被って来たのは何だ」。いわく「西の家の雄鶏とっつぁんです」。「おまえはいったい何だ」と訊くと、答えて言うには「わしは年老いた蠍(さそり)です」。そこで書生は明け方になるまで静かにひたすら本を朗誦して、寝ようとしなかった。明け方になると、駅館の吏員がやって来て、書生が無事なのを見て驚き、「どうしてあなただけが死なないで済んだのでしょう」と言った。書生が言うよう「急いで剣を探していらっしゃい。わたしはあなたとともに怪物を捕まえましょう」。そして剣を握り、昨夜返事がした場所に行くと、果して老いた蠍を見つけた。大きさは琵琶ほどもあり、毒尾の長さは数尺だった。西の家では老いた雄鶏を見つけ、北の家では老いた雌豚を見つけた。合わせてこの三匹を殺すと、駅館の厄難は漸く

収まり、以後ずっと災害は無かった。

書生が劫を経た動物どもに生命を奪われなかったのは、単に起きていたばかりではなく、本、多分儒書を読んでいたからでもあろうか。しからば、学問の一得と言いつべし。

官営の宿駅、すなわち駅站（たん）にあるこれも官営の旅館は、『搜神記』ではしばしば妖怪変化の出没する場所に擬せられている。巻十六「汝南汝陽西門亭」（妖怪は不明）、巻十八「南陽西郊有一亭」（妖怪は老狐）、「北部督郵」（妖怪は老狐）、「陳郡謝鯤」（妖怪は鹿）、「廬陵郡都亭」（妖怪は老豨（き）〈老いた豚〉と老狸[21]〈老いた野猫、あるいは山猫〉の舞台がいずれもこれ。しかし、これらの物語はいずれも妖怪が駅亭に棲む何物かに声を掛ける型ではないため、ここでは紹介しない。

ではもう一つ類話を。これは巻十九にある。題すれば「丹陽道士」か。

これは『太平広記』巻四百六十七水族四水族為人に「謝非」として収録されている。若干語句の相違があるが、大筋には関係無い。

原文は以下の通り。

丹陽道士謝非，往石城買冶釜。還，日暮，不及至家。山中廟舎於渓水上，入中宿。大声語曰：「吾是天帝使者，停此宿。」猶畏人劫奪其釜，意苦搔搔不安。二更中，有来至廟門者，呼曰：「何銅。」銅応喏。曰：「廟中有人気，是誰？」銅云：「有人，言是天帝使者。」少頃便還。須臾，又有来者，呼銅，問之如前，銅答如故，復嘆息而去。非驚擾

不得眠，遂起，呼銅問之：「先来者誰？」答言：「是水辺穴中白鼉。」「汝是何等物？」答言：「是廟北巌嵌中亀也。」非皆陰識之。天明，便告居人，言：「此廟中無神。但是亀，鼉之輩，徒費酒食祀之，急具鍤来，共往伐之。」諸人亦頗疑之。於是并会伐採掘，皆殺之。遂壊廟絶祀，自後安静。

読み下し文。

丹陽の道士謝非、石城に往きて冶釜を買う。還るに、日暮れ、家に至るに及ばず。山中廟舎渓水の上りにあり。入りて宿に中つ。大声して語りて曰く「吾是天帝の使者にして、此の宿に停まる」と。猶人の其の釜を劫奪するを畏れ、意い苦しみ搔搔として安からず。二更中、来りて廟門に至れる者の有り、呼びて曰く「何んぞ銅や」と。銅喏と応ず。曰く「廟中人気有り、是誰なるや」と。銅の云えらく「人有りて、是天帝の使者なり、と言えり」と。少頃にして便ち還る。須臾にして、又来れる者有り。銅と呼び、之に問うこと前の如く、銅の答うること故の如し、復嘆息して去る。非驚擾して眠ることを得ず、遂に起ちて、銅と呼びて之に問う。「先に来たれる者は誰なるや」と。答えて言う「是水辺の穴中の白鼉なり」と。「汝是何らの物なるや」と。答えて言う「是廟北の巌嵌中の亀なり」と。非皆陰かに之を識ゆ。天明、便ち居人に告げて言う「此の廟中神無し。但是亀鼉の輩のみ。徒らに酒食を費やして之を祀れり。急ぎ鍤を具して来たれ、共に往きて之を伐たん」と。諸人亦頗る之を疑う。是において并せ会して伐掘し、皆之を殺せり。遂に廟を壊し祀を絶ち、自後安静なり。

現代語訳。

丹陽[22]の道士[23]謝非が石城[24]に出掛けて丹薬[25]を煉成するための釜を買った。帰宅する途中、日が暮れてしまい、家に辿り

着くことができなかった。山の中で社（やしろ）が谷川の畔（ほとり）にあったので中に入って宿にした。そして大きな声で「わたしは天帝[26]の使者であるぞ。この宿に泊まることにした」とどなった。だがなお、せっかく買った釜を誰かが奪うのではないか、と危惧し、あれこれと思い煩って不安で眠れずにいた。二更[27]中、社の門までやって来た者が有り、「銅はどこにおる」と呼んだ。すると銅が「はい」と応答した。曰く「社の中に人間の気配がある。これはいったい何者だ」。銅が言うよう「人間が参りまして、天帝の使者である、と申しております」。その者は〔「溜息をついたが」が欠落している〕暫くして帰って行った。少しすると、またやって来た者がある。「銅」と呼び、前の者と同様の質問をし、銅の答えもさっきと変わらなかった。するとこの者もまた溜息をついて立ち去った。非は胸がどきどきして眠ることができず、とうとう立ち上がって、「銅」と呼んで訊いた。「初め来た者は誰なのだ」。答えて言うには「あれは水辺（みずべ）の穴の中に棲んでおります白い鼉龍（だりゅう）[28]でございます」。「おまえはいったいなにやつだ」と問うと、答えて言うには「これは社の北の岩穴の中に棲んでおります亀でございます」〔この箇所はおかしい。社の中にいないはずの存在が、社の中で返答していることになってしまう。亀は二番目にやって来た者なのである。そして留守居役の「銅」の正体は記されていないが、社中の銅製の祭具のたぐいかも知れない〕。非は全てをこっそり覚えておいた。夜が明けると、辺りの住民に告げて「この社には神はおりませぬぞ。ただ亀、鼉龍といったものどもがいるだけじゃ。あいつらを祭ったりしたのは酒食の無駄遣いだったのですて。急いで鍬（すき）を用意してござれ。一緒に行ってあいつらをやっつけましょう」と言った。人人もやはり大いに不審に思っていたところなので、寄り集まって探し出し、全て殺してしまった。とうとう社をも壊し祭礼を止めたが、その後は平穏無事だった。

亀や鼉龍は社に供えられた酒、食べ物、あるいは犠牲の動物などを飲みかつ喰らって、のんびり暮らしていただけ

であり、夜中に来たのは、お供えのお下がりを忝く頂戴するために他ならない。だから、そこに「天帝の使者」がいる、と聴いて、がっかりして引き上げたのである。人間を喰う習慣はもともと無かったのではないか。「天帝の使者」を畏れ憚ったことだけが、道士を喰おうとしなかった理由ではあるまい。人喰いを常習にしていたなら、近在の衆としては道士に対し、よく生きていた、とかなんとか、物語を飾る驚嘆の言葉を掛けていてしかるべしなので。もっとも、いずれにせよ、右の物語には訳文で指摘したように大きな欠落がある。鼉龍や亀の精がどういう容姿、装束の人間に化けて社にやって来たかの描写も無い。

以上『搜神記』の三話は、これら精怪に仮託して何かをあげつらったのではなく、また、虚妄を確信しながらおもしろい物語に仕立てたのでもない。干宝は超自然的な事象とて必ずあり得ることとして『搜神記』を編んだ、と言われるので。

〔三〕

宋の李昉（りぼう）撰『太平広記』[29]で「精怪類」の項を調べると、三百六十八巻～三百七十一巻（これは半ばまで）は「雑器用」とあり、さまざまな器物や土偶の怪の話三十八編[30]を収録している。このうち詩を詠む精怪たちの話に限れば左記のごとくである。もっとも右の『搜神記』の類話はない。これらは全て古びた器物の精怪であり、彼らが出没する家に泊まった人間には別段手は出さず、多くは自らの正体を仄めかす詩を詠んで、夜明けとともに姿を消し、詩からいかなる器物かを推察した人間が彼らを見届ける〔別に燃やしたり、土中に埋めたり、といった処置はしない〕、という型である。この型も中国後代、および日本に影響を与えているので是非解説しておきたい。

巻三百六十九

「元無有」（『玄怪録』[31]）。故杵（古い砧杵＝砧に用いる杵[32]）、灯台（燭台）、水桶、破鐺（壊れた鍋）。

巻三百七十

「崔𣪘」（『宣室志』）。文筆（文字を書く筆）。

巻三百七十一

「独孤彦」（『宣室志』）。鉄杵（鉄の杵）、甑（こしき。瓦製の蒸し器）。

「姚康成」（『霊怪集』）。鉄銚子（鉄の徳利）、破笛（壊れた笛）、禿黍穰箒（黍殻製のちびた箒）。

このうち「元無有」はこんな物語。

まず原文[33]を挙げる。〔旧字は新字に改めた。句点は原文通り〕。

宝応中。有元無有。常以仲春末。独行維揚郊野。値日晩。風雨大至。時兵荒後。人戸多逃。遂入路旁空荘。須臾霽止。斜月方出。無有坐北窗。忽聞西廊有行人声。未幾。見月中有四人。衣冠皆異。相与談諧。吟詠甚暢。乃云。今夕如秋。風月若此。吾輩豈不為一言。以展平生之事也。其一人即曰云云。吟詠既朗。無有聴之具悉。其一衣冠長人即先吟曰。斉紈魯縞如霜雪。寥亮高声予所発。其二黒衣冠短陋人詩曰。嘉賓良会清夜時。煌煌灯燭我能持。其三故弊黄衣冠亦短陋。詩曰。清冷之泉候朝汲。桑綆相索常出入。其四故黒衣冠人詩曰。爨薪貯泉相煎熬。充他口腹我為労。無有亦不以四人為異。四人亦不虞無有之在堂隍也。遞相褒賞。羨其自負。則雖阮嗣宗詠懐。亦若不能加矣。四人遅明方帰

旧所。無有就尋之。堂中惟有故杵灯台水桶破鐺。乃知四人。即此物所為也。

次に読み下し文にしてみる〔句点を読点に改めた箇所がある〕。

宝応中、元無有なる有り。常て仲春の末を以て、独り維揚の郊野に行く。日の晩るるに値り、風雨大いに至る。時に兵荒の後なり。人戸多く逃れり。遂に路旁の空荘に入る。須臾にして霽止す。斜月方に出でんとす。無有北窗に坐す。忽ち西廊に行人の声有るを聞く。未だ幾ばくもあらずして、月中に四人の有るを見る。衣冠皆異なれり。相い与に談諧し、吟詠甚だ暢やかなり。乃ち云く。今夕秋の如し。風月此くの若し。吾輩豈一言を為して、以て平生の事を展べざるべけんや、と。其の一人即ち曰く、云云と。吟詠既に朗かなり。無有之を具悉に聴く。其の一なる衣冠せる長き人即ち先ず吟じて曰く。斉紈魯縞霜雪の如し。寥亮たる高声予の発する所、と。其の二なる黒き衣冠にして短陋の人詩いて曰く。嘉賓の良会清夜の時、煌煌たる灯燭我能く持せり、と。其の三なる故く弊れたる黄の衣冠にして亦短陋なるが、詩いて曰く。清冷なる泉を候朝に汲み、桑綆相い索きて常に出入す、と。其の四なる故き黒き衣冠の人詩いて曰く。薪を爨き泉を貯え相い煎熬す。他の口腹を充たすを我が労と為す、と。無有亦四人を以て異と為さず。四人亦無有の堂隍に在るを虞れず。遞い相いて褒賞し、其の自負するを羨む。則ち阮嗣宗の詠懐と雖も、亦能く加えざるが若し。四人遅明にして方に旧所に帰る。無有就きて之を尋ぬるに、堂中惟故杵灯台水桶破鐺の有るのみ。乃ち四人の即ち此の物の所為なるを知れり。

最後に現代語訳[34]を試みる。

唐の宝応元年[35]元無有という者があった。嘗て春の半ば〔陰暦二月〕の末つ方、独りで維揚[36]の郊外に行ったことがある。暮れ方になって、ひどい吹き降り。折しも戦乱[37]があった後のこととて、多くの住民が難を避け逃亡している。そこでとうとう道から脇に入った空き屋敷で雨宿りした。しばらくして雨が上がって晴れ渡り、夕月[38]が昇って来る。無有が〔表座敷の〕北に面した窓際に座っていると、〔中庭を隔てて〕西の回廊を通る人の声がするのが聞こえた。やがて月明に四人の姿が見えた。衣装といい、冠といい、皆一風変わった身なり。お互いに打ち解けた話しぶりで、のんびりと詩を吟じたりするのだった。そのうちだれかが言うには、「今宵はまるで秋のよう。景色がこんな趣きだ。どうだ、わたしら、日常のことを是非とも詩に詠もうじゃないか」。するとまただれかがなんとか言った。やがて吟詠が始まり、無有はこれらを具に全て聴き取ったのである。

先ず最初は衣冠を着けた丈の高い男。

斉魯[39]の白き練り絹は、あたかも霜か雪かのよう、
朗らで高きかの音はこのそれがしが出せしぞ。

次は黒い衣冠で、背の低い者。

佳き客人の楽しき宴、清しき夜さりに
明るき灯明、しかと捧げつ、この我は。

三番目は古く破れた衣冠で、やはり背の低いのが、

清く冷たき井水(せいすい)を、朝な朝なに汲みてしか、

桑〔の繊維〕を編みたる釣瓶(つるべ)の縄で井戸に出入りをいたせしか。

四番目の黒い衣冠の者は、

薪(たきぎ)を燃やし、井水満たし、ゆるりとろりと炊(た)き上げつ。

他の衆をば満腹にして進ぜるが職分よ。

無有はこの四人が妙ちきりんだとは思わなかったし、四人の方も無有が表座敷[10]にいるのを気にしなかった。お互い同士褒め合って、相手の自負するさまを羨むのだ。阮籍(げんせき)[11]の詩『詠懐八十二首』だって、これには及ぶまい、といったあんばい。

四人は夜明けがたになってやっと出て来た所へ戻って行った。無有が探してみると、屋敷内には砧に用いる古い杵、燭台、水桶、壊れた鍋があるだけだった。そこで四人が実はこれらの変化だったことを知ったのである。

これは到底民話ではない。『玄怪録』の著者、つまり牛僧孺(ぎゅうそうじゅ)の戯文であることは明らか。怪事を見聞した「元無有」〔「もともといやあしない」の意〕なる人物の姓名そのものがこれを裏書している。ただ、どうしてこんな戯文を

記したのか。廟堂の顕官として権勢を恣にし、あるいは、誠心誠意天子に忠義を尽くした面面も、一朝用いられなくなれば、どこぞの配所に流謫されてただ老残の身を託つのみ、とでもいう諷刺なのかな、と思う。彼がその代表格だった科挙の進士を振り出しの高級官僚と、李徳祐を旗頭とする門閥貴族の抗争角逐はなんとも有名な話だから。

なお、さまざまな変化が一堂に会し、行き暮れてたまたまそこに宿った文人に詩を詠んで聞かせる、というこの主題を大いに発展させた話としてはやはり唐の『東陽夜怪録』（作者不詳）がある。登場形態は全部動物で、病気の駱駝、瀕死の驢馬、老いさらばえた鶏、三毛猫、兄弟の蝟、毛の抜けた犬といった具合。文人の名は成自虚〔「おのずと無くなる」の意か〕、字は到本〔「源に帰る」とでもいう意か〕である。

明初の瞿佑作[42]『剪刀新話』を模した李禎作[43]『剪刀余話』の「武平霊怪録」では土偶・器物の精怪が廃寺で詩を詠じる。塑像の仏像、欠け硯、禿びた筆、銚子、土釜、破れ蒲団、木魚、棺に掛ける蔽い、古い扇の面面。

これらの話の精怪は、『搜神記』のそれとは異なり、作者が信じているわけではない。全て世は虚しい。器物、動物はもとより、人間も老少不定が世の習いではある。さはさりながらやはり齢を重ねればそれだけ惨め、ぼろぼろになって棄てられるのだ、との自嘲と諦念を語ったもの。

なお、「武平霊怪録」は『剪刀余話』の翻案が多く含まれている浅井了意の[44]『狗張子』[45]巻之六に「塩田平九郎怪異を見る」[46]として収められている、とこじつけられようか。とは申せ、辛うじてその全体の構成と末尾の部分が前者に着想を得た、と言える程度である。翻案とするにはあまりにも遠い。精怪の数は三、破れ団扇、割れ笛、古箒。それぞれ吟じた七言絶句を読み下しにすれば、かくのごとし。

団扇

高低竪起孤輪月
扇動縦横興涼風
弄罷委棄埋湿土
爛皮腐骨故情窮

高低竪起すれば孤輪の月
扇動縦横すれば涼風を興す
弄罷み委棄せられ湿土に埋もる
爛皮腐骨故情窮す

笛

当時得意龍吟調
一曲飛声渉碧霄
今日庭中破砕竹
方慕穿林舞謡媚

時に当たり意を得たり龍吟の調べ
一曲の飛声碧霄に渉る
今日庭中破砕の竹
方に慕う林を穿つ舞謡の媚を

箒

荐掃埃塵更靡遑
愁懐疲羸鬚髯喪
如今憔悴荒村客
衰朽玲瑯倚短牆

荐に埃塵を掃きて更に遑靡し
愁懐疲羸して鬚髯喪う
如今憔悴して荒村の客
衰朽玲瑯短牆に倚る

「竛竮」（孤独な様）は原典『怪談名作集』では「冷竮」とあるが、誤植であろう。今改めておく。

先に挙げた『霊怪集』の「姚康成」に登場するのは、鉄銚子（鉄の徳利）、破笛（壊れた笛）、禿黍穰箒（黍殻製のちびた箒）なので、あるいはこちらの翻案かも知れない。彼らの詠んだ詩も七言絶句である。ただし「塩田平九郎怪異を見る」の詩はそれとは全く異なる。浅井了意の創作か。

〔三〕

関敬吾編著『日本昔話大成』[47]七には「宝の化け物」、「化け物寺」、「化け物問答」の三種の代表話がその類話とともに収められている。これらの諸話は「宝の化け物」型と「化け物寺」型の二種に整理し直す必要があろう。

関の挙げる「宝の化け物」の宝は必ずしも金銀銅とそろっているわけではないし、屋敷に留守居役が控えているのも少ないようだが、大体において宝自身が世に出たがって怪異を示し、それを恐れなかった勇者がそれを自分の所有とする、という型。むしろ「化け物寺」の項目に入っている話にこの型の代表例とすべきものが見える。

「化け物寺」の項目には大別すると三つの話型が入り混じっている。

①「宝の化け物」型　これはおおむね『搜神記』の「細腰」に似ている。

類話の一つ（大分県臼杵（うすき）市）の粗筋。

武者修行の侍が化け物が出るという家に泊まる。夜中に床下から黄色の裃（かみしも）を着た者が現れ、「さいわい」と呼ぶ。「へーい」と返事があって、何者かが応対、訪問者は去る。次いで赤い〔位の順、つまり価値の高い順に出るなら

「白い」でないとおかしい〕裃を着た者が出現、同様のことがある。次いで白い〔位の順に出るなら「赤い」でないとおかしい〕裃を着た者が同じことをする。これが済んだあと、侍は真似をして「さいわい」と呼ぶ。応対に出た者を捕らえて訊問すると、相手は訳を打ち明ける。そのことばによれば、元来この家は金持ちの所有だったのであり、床下に金貨、銀貨、銅貨が埋めてある。黄色の裃は黄金の精、白い裃は白銀の精、赤い裃は赤銅の精、自分はそれらを入れた壺の精〔なぜ壺が「さいわい」なのか分からない。「幸い」、つまり「宝」を管理しているからだろうか〕だ、と。侍は翌朝村人たちとともに床下を掘ると、大きな壺に入った金・銀・銅貨が出て来る。

②「漢字の化け物」型　いわくある建物に出没する化け物が、そこへ泊まった人間に自らの正体を漢字の音（おん）で告げる。文盲の有象無象にはどうせ分かるまい、と思ってのことだが、教養のある僧侶あるいは武士がこれを類推、棲息する場所・素性を突き止め、処分して怪異を祓う。これは「化け物問答」のモティーフでもあるので、「化け物問答」については改めて解説はしない。いずれにせよ、こうした物語の語り手が聴き手より多少文字を心得ていたからこそ成立した型である。

代表話（岡山県岡山市）の粗筋。

侍が化け物寺に泊まる。夜更けに戸を叩く者があって、「木へんに春のていていこぼしは内か」と訊ねる。中からは「今日は好い肴（さかな）があるから入れ」との返事。これが三回繰り返される。〔四回でなければ纏らない[48]。東西南北の北が欠けているばかりか、「最初からこの寺に棲む」と称する余計な存在が代わりに登場する始末。語り手の記憶不足であろう〕。それから、以下の連中が次次に、唄を歌い、踊りながら、侍を喰おうとその部屋を覗くが、睨み返され、

こいつは手強い、と察知して引き下がる。

「とうやのばず」→「東野の馬頭」〔東の野原に棄てられた馬の頭〕

その唄。

とうやのばずは愛(いと)しいことよ、
いつを楽とも思いもせいで、
腰は砕けて、足打ち折られ、
後は野山の土となる、土となる。

「さいちくりんのいちがんけい」→「西竹林の一眼鶏」〔西の竹藪にいる一つ目の鶏〕

その唄。

さいちくりんのいちがんけいは、
世にも稀なる片輪と生まれ、
人の情けはよう蒙(こうむ)らで、
西の林に独り寝(ぬ)る、〔独り〕寝る。

「なんちのぎょじょ」→「南池の魚女」〔南の池に棲む人魚〕

その唄。

なんちのぎょじょは、
冷たい身やな、
水を家とも床ともなして、うんぬん〔語り手は次の文句を忘却〕

「ちゃかす」→（茶滓）。これは前述したように余計な因子の混入。かつまた芸無しであって、唄とも言えないその科白は、

わしはこの家に千年棲んだ
ちゃかすでござる。

なお、「木へんに春のていていこぼし」→（椿で拵えた木槌）なる留守居役が怪を示すのは、「椿を信仰上の特別な木とみなすところから、これから道具を作ることを忌む地方も多い」[49]との記述が参考になろう。

結局この話型は中国の詩を嗜む古い器物たちがかように訛伝されたものではないかな。もとより漢詩は日本の民話に全くそぐわない。そこで、前掲のような唄に変わる。

なお江戸期の怪談集の一つ『宿直草』[50]冒頭（巻一の一）の「廃れし寺をとりたてし僧のこと」が恐らくこの種の民話の源泉であろう。つまり、書承の物語が口承となった好例と思われる。粗筋は以下の通り。

諸国行脚の僧がある所で立派な寺を見る。住職はいない。近くの住民に訊ねると、これまで何人も僧が来たが、翌朝には行方不明、とのこと。この僧は檀家一同の止めるのも構わず、寺に留まる。丑三つ刻に庫裏に一丈余の光り物が出る。やがて外から「椿木候か」と訪う声。光り物が「誰ぞ」と言えば「東野の野干」と応える。入って来た姿を見れば、身の丈五尺ばかり、両眼は日月のよう。次には「南池の鯉魚」と名乗る者。身の丈七、八尺、目は黄金、身には白銀の鎧。次の者は「西竹林の一足の鶏」。朱の兜、紫の鎧、左右に翼が生え、身の丈六尺ばかり。最後のは「北山の古狸」と称し、色は見分け難く、身の丈四尺ほど。これら全部で五つの化け物は僧を取り囲み、いがみ鳴きして脅しに掛かったが、僧は般若心経を唱えて一向動じないので、どこかへ行ってしまう。朝の勤行をしていると、壇徒が五、六人やって来る。彼らに僧は化け物の正体を指摘する。いわく「およそ化け物四つは外、ひとつは内に候。五つながら所を覚え候。先づ東の野に狐有るべし。南の池に鯉、西の藪に足ひとつある庭鳥、北の山にたぬき、是外より来たる四つなり」。村人は得物を携えてこれらを狩り出し、殺してしまう。それが終わってから僧は、この庫裏の材木に椿が使われていないか、と訊ねる。乾の隅の柱がそれ、と分り、これを取り替える。寺はそれから繁盛した。

かように、かなりの数の漢字とその音読みを鏤め、なかなかに高い（?）教養が示されている。従って、文字に暗く、この物語を耳で聴くだけの庶民は、化け物の名乗りからその正体を推測することはできない。それを僧侶――と言うか、語り手――が解説するわけで、これが中国での精怪の詩に相当する。庶民は感心したことだろう。

しかしこの文字となった物語もまた民話を素材にしたようだ。作者は結びにこう記している。「外より来たる四つは、年経て化くる術を覚ゆる事もあるべし。内の椿の光るこそ、おぼつかなくも怪しけれ〔＝よく分からないけれど

妙なことである〕」。椿の古木は奇異を示すことがある、との民間信仰を知らないわけだから、骨子は民話から得たのであって、作者の創作ではない、と類推される。もっとも作者は次いで「かからば、などか古下駄も師走を待ちて踊らざらん[51]〔＝それなら、古下駄だって師走になって踊りそうだ〕」と言っているから、動物・器物が劫を経ると、怪異を表すことがある、との民間信仰は共有しているのである。

③「古い器物の化け物」型　『百鬼夜行絵巻』[52]などでも分かるように、棄てられた傘、蓑、合羽、足駄、草履、柄杓、笊、杵、臼などは化けるのであって、夜な夜な踊って人間を脅かす。ただしこの連中、学の持ち合わせも無いが、さしたる凶暴性も無い。化け物の通有性はこうだ、と思い込んだ者によって、類型的に「人喰い」にされていることもあるが。

さて、『搜神記』の直輸入であるにせよ、詩を嗜む中国の古い器物たちの書物になっている物語（書き手も読者も当然教養人である）が、日本の僧侶・公家・武士などまずしかるべき学識ある人人によって移入・翻案されたものであるにせよ、我が国でこうした民話が好んで語られ、聴かれたことの背景にある思想は何か、と考えてみるのも一興であろう。『搜神記』型か、〔二〕で紹介した中国の知識階級の「世は無常」型か。それとも他にあるのか。他にあるとすれば、縄文時代以来数千年に亘って日本人の理性の下に澱んでいる、と思われる（いや、証明はできませんけどね）精霊信仰、すなわち、万物に魂がある、とする思想――いや、感覚というべきかな――をまず挙げるべきであろう。『百鬼夜行絵巻』の精怪、日本流に申さば、付喪神どもがあれほど楽しげに跋扈跳梁、なんとも精彩を発揮しているのは、もとより絵師の彩管のお蔭ではあるが、そうした絵師の才能を支える広汎・強大な共通認識があっての

ことと思えてならない。しかしながら論者は浅学非才、そうした仮説を検証するだけの材料を皆目持ち合わせていないので、気の利いた化け物の顰に倣い、この辺で早早に引っ込むことにして、この小論を終える次第である。

注

（1）干宝　生没年未詳。字は令升。現在の河南省にあった新蔡郡出身。幼い時から学問に励み、群書を広く読んだ。生来陰陽術数を好んだ。東晋の元帝（司馬睿。在位三一七―三二）の時、佐著作郎、著作郎として仕え、その後、山陰令、始安太守、司徒右長史、散騎常侍などの職を歴任。

（2）干宝編撰と言われる「晋散騎常侍新蔡干宝令升選」とある自序が残されている。しかし、後世の複数の文人がこれに自らの筆録を混入させた可能性は大いにあろう。たとえば巻四「河伯」は「宋時」（宋の時代）で始まり、巻十一「相思樹」は「宋康王」で始まる。六朝の宋であろうが、もとより晋以降である。

（3）民間伝承に多大な影響を与えた　奇妙な記述と思われるかも知れない。しかし、口承文芸が文人の素材とされて文学化されるのと同様、書籍となった文学が巷間に口承されて民話となる現象も少なくないのである。日本では前者の例としてたとえば『竹取物語』が、後者の例としてたとえば民話「鉢かつぎ」（「御伽草子」の「鉢かづき」から）が挙げられよう。

（4）伝播した痕跡が少なくない　『宇治拾遺物語』だけを例に取っても、『搜神記』に収録されたものと同工異曲の物語が四つある。ただし、『搜神記』が源かも知れない、と言えそうなのは(1)のみに留まる。

(1)巻第一・八「易ノ占シテ金取出ス事」←巻三「隗炤」

(2)巻第二・一二「唐卒塔婆ニ血付ル事」←巻十三「由拳県」（「述異記」巻上にも）

(3)巻第三・一六「雀報レ恩事」←巻二十「弘農楊宝」

(4)巻第一〇・六「吾嬬人止二生贄一事」←巻十九「丹陽道士」（本文で扱った）

（5）原文　（晋）干寶撰『新校搜神記　二十巻』（世界書局〈台北〉、二〇〇三第二版）による。

（6）現代語訳　これは論者の試訳だが、『搜神記』の全訳には次のものがある。干宝著竹田晃訳『搜神記』（ワイド東洋文庫一〇、平凡社、二〇〇三）。これは一九六四年初版の東洋文庫三巻本を一冊に纏めたもの。

（7）魏郡　現代の山西省大名。邯鄲の近く。

（8）北堂　奥座敷。

(9) 三更が果てる頃　午前二時頃。

(10) 一丈　十尺。東晋の一尺を二四・四五センチとすれば、十尺は二メーター四四センチ五ミリ。もっともそう細かく考えることもあるまいから、ざっと二・五メーター。

(11) 杵　片手搗きの杵で、手で握る中央部がくびれている。杵には、砧の上に布を拡げ、これを打ち和らげる砧杵もあるが、ここでは竈の下から発見されたのだから、籾を搗いて精米したりする食品加工用の杵の方であろう。

(12) 金銀五百斤　一斤は一六両。東晋の一両を一三・九二グラムとすれば、一斤は二二二・七二グラム。五百斤は一一一・三六キロ。

(13) 銭一千万貫「千万」は「莫大」の意であろう。文字通り一千万だと、一貫は銅銭千枚（千文）だから銅銭百万枚にもなってしまう。もっとも巻三「上党鮑瑗」では「銭数十万、銅鉄器二万余」が井戸の中から出て来るが。

(14) 安陽　現代も山西省にある。邯鄲南隣の都市。

(15) 駅館　官営の旅宿。

(16) 書生　読書人。古くは多く儒生を指す。この話の場合、ただ、書生、と名乗るだけで駅館で相当の待遇を受けたようだ。

(17) 術数の道　さまざまな方術――神仙の術――を用い、自然界の注意すべき現象を観察することで、人の寿命や運命を予知する術。

(18) 黒い単衣　皁衣は時代によっては下僕、および彼らが着る服をも言うが、ここではもちろん本性が黒い豚（豕・家猪）だからである。

(19) 亭主　本来なら亭長。すなわち宿駅の長で駅館を管理している者。しかしここでは妖怪どもの間で駅館の留守居役とされている物の怪。

(20) 赤い頭巾を被った者　雄鶏の鶏冠を仄めかしている。

(21) 狸　「貍」が正字。「たぬき」ではない。源順著『倭名類聚抄』（『倭名抄』・『和名抄』。承平元＝九三一撰進）では「貍」の和名は「太奴木」。しかし、李時珍原著／鈴木真海訳文／白井光太郎監修・校注『頭註国訳本草綱目』（春陽堂、昭和四―九）によれば「和名やまねこ」。頭注に「別ニ野生ねこ又おほやまねこアリ」とある。李時珍（一五一八頃―九三）は「貍に数種あり。大小狐のごとし。（中略）。貓のごとくして円頭大尾なるものを貓貍となす。その気臭し。肉食うべからず。（中略）斑ありて貙虎のごとくして尖頭方口なるものを虎貍となす。よく虫鼠果実を食う。その肉臭からずして食うべし。（後略）」と述べている。「虎貍」は雑食性なので、この点「たぬき」と同じだが、形状は異なっている。一方 橘 成季作『古今著聞集』（建長六＝一二五四成立）には「狸」が妖異を表わす話が四編あるが、うち二例では捕らえられた「狸」が料理されて食われている。しかし「たぬき」の肉は臭いし、味もよろしくないそうである（土に埋めるなどして臭みを抜く調理技術もある、というが）。姿の似た「あなぐま」（貒。「まみ」「みたぬき」とも訓じる）は大層食味が良い（『本草綱目啓蒙』『大和本草』など）そうなので、これとの混同と解釈すれば、『著聞集』のこれらの話の「狸」は「たぬき」でよかろう。さて、動作が遅鈍、性格が臆病（恐怖に襲われると瞬間的に気絶してしまう。専門用語では「擬死」。例の「たぬき寝入り」はこれ）、胴長短足で、あの愛嬌ある顔の動物が日本で変化の一類

とされるのはどうにも合点が行かない。たとえば、人見必大著『本朝食鑑』（元禄八＝一六九五刊）には、「たぬきは腹鼓を打つ。老いたたぬきは化けて人を喰う。山家に入り込んで炉端に座り、暖まると陰嚢を延ばし、長さ四、五尺にも達するそれで女性や子どもを包んでたぶらかす。云云」と記されている（島田勇雄訳注『本朝食鑑』、東洋文庫、平凡社、一九八一）。なるほど、これでは「かちかち山」で婆様を殺し、その姿に化けて、婆様の肉を汁にして爺様に喰わせるという悪役を演じるのもむべなるかな。案ずるに、中国では「のねこ」「やまねこ」である「貍」が、やまねこが特定の地域にしか棲息しない日本で、人家の近くにも出没するごくありふれた獣「たぬき」を表わす漢字にいつしか当てられ、「貍」が妖怪となってたちの悪い所業を働く、中国における数数の故事も伝えられて、「貍」→「狸」→「たぬき」が日本では「化ける」「兇悪なこともある」とされるようになったのであろう。おそらく鎌倉・室町時代に。

(22) 丹陽　現代の鎮江。江蘇省にある。

(23) 道士　道教の修行者。道教は後漢末期頃から勃興した中国在来の宗教。老子を祖とする教義を確定し、仏教を真似た教団を形成したもの。天上を支配する元始天尊、天から初めて地上に遣わされて道を説いた太上老君、後漢末に再び地上に出現して教団を組織した玉皇上帝＝張道陵の三柱の神を最上神とする。この他にも大小無数の神格がある。

(24) 石城　江蘇省呉県の県城に当たるか。

(25) 丹薬　道士が不老不死を願って作る薬。

(26) 天帝　天を支配する神。万物の創造者。天公。

(27) 二更　午後九～十一時。

(28) 鼉龍　長江鰐。鰐目の爬虫類。体長二メーター以上になったそうな。かつて中国に棲息。その皮を太鼓に張ると、よく鳴ったとか。「白い」のは突然変異のアルビノではなく劫を経たためであろう。

(29) 李昉撰『太平広記』　宋の太平興国二（九七七）年に太宗皇帝の勅命で李昉らが作成。漢代（紀元前二〇六―王莽建国の「新」で中断―二二〇）から五代（後梁・後唐・後晋・後漢・後周。九〇四―五九）までの小説・伝記を集め、項目別に編集したもの。全五百巻。手軽に入手できる刊本としては、李昉等編『太平廣記』全十冊（中華書局〈北京〉、一九六一第一版、二〇〇三第七次印刷）がある。これは簡体字ではなく旧字である上、句点が付されている。旧字も句点も大いに助かる。また、王秀梅・王泓冰編『『太平廣記』索引』（中華書局、一九九六第一版、二〇〇三第二次印刷）、張国風著『『太平廣記版本考述』（中華書局、二〇〇四第一版、二〇〇四第一次印刷）も出版されている。特に前者の存在はありがたい。

(30) さまざまな器物や土偶の怪の話三十八編　内容はさまざま。「姜修」はその名の酒飲みの許に黒装束の丈三尺ほどのずんぐりむっくりが訪れ、痛飲した挙句、古い酒甕となる無邪気な話だが、「王屋薪者」（王屋に薪る者＝王屋山の木樵）のように、鉄の銅鑼が化けた仏僧と亀の背骨が化

けた道士が、互いの教えを誇り、争うのを、通り合わせた木樵が嘲り、双方とも役立たずだ、として殺そうとすると、正体を現す、という、明らかに儒士が仏教・道教を諷刺したものもある。

(31)『玄怪録』牛僧孺（七七九―八四七）著。牛僧孺は科挙（官吏登用）の進士を振り出しとした唐朝の高官。隋の文帝の治世末期、五九八（一説に六〇四）年に始まり、唐代に大成した科挙制度による高級官僚の中心的人物で、李徳裕（七八七―八四九）を代表とする世襲貴族勢力と苛烈な権力闘争を行った。

(32) 砧に用いる杵　前掲注「杵」参照。布の艶出しのために砧（石の叩き台）に拡げて打つ杵。この作業は洗濯のためにもヨーロッパからアジア一円に掛けて行われた。

(33) 原文『太平廣記』巻三百六十九「元無有」。前掲中華書局第七次版。

(34) 現代語訳　これは論者の試訳だが、前野直彬（なおあき）による名訳がある。前野直彬訳『六朝・唐・宋小説集』（中国古典文学全集6、平凡社、昭和三四初版、三七再版）所収「空家の怪」。

(35) 宝応元年　唐の粛宗の年号。七六二年。

(36) 維揚　現江蘇省江都県の揚州。もと「惟揚」に作る。古くから諸人が憧れた、富裕で繁華な都市だった。隋の煬帝（ようだい）が開鑿（かいさく）させた中国南北を結ぶ大運河と中国中部の大動脈長江下流部揚子江の交叉点という交通の要衝に当たり、唐代にはイスラムの大帝国ウマイヤ朝（七五〇アッバース朝に取って代わられる）などの商人もこの地に来て貿易を行う者が多く、国際都市として殷賑（いんしん）を極めた。西アジアから天山南路・北路を経て長安・洛陽に通じた陸上交通路は、大運河によって揚州に達し、更にここからは海路で泉州・広州を経由、南海、インド洋を渡ってペルシア湾に及び、当時湾岸最大の貿易河港アル・バスラ（アッバース朝においては人口三十万を超えた）に到った。アル・バスラはペルシア湾から五五キロ、ティグリス、ユーフラテスが合流したシャッタル・アラブ河と運河で結ばれている。ティグリスへと遡ると、上流五四五キロにはバクダードがある。

(37) 戦乱　唐の皇帝玄宗（在位七一二―五六）は国境に節度使を配置、これらに兵馬財政の権を委譲した。ために外敵は効果的に防禦され、国威隆盛となって、いわゆる「開元（開元年間＝七一三―四二）の治」とも称揚される白銀時代が齎された。しかし、玄宗の寵を得て平盧（へいろ）・范陽（はんよう）・河東（かとう）の三節度使を兼ねた安録山が七五五年乱を起こし、東都洛陽を陥（おと）し、首都長安に迫り、自ら大燕皇帝と号した。七五七年その実子慶緒に殺される。玄宗は蒙塵して蜀に難を避け、子の粛宗（在位七五六―六一）はウイグルなどの兵を借りて政権回復を図った。しかし叛乱が平定されたのは漸く粛宗の子の代宗（在位七六二―六五）の世になってである。

(38) 夕月　「斜月」は本来「西に落ちかかる月」の意だが、ここでは前後の文脈から意訳した。

(39) 斉魯（せいろ）　斉・魯はともに周代の諸侯の国だが、ここではともに山東省の別称。山東省は絹織物で有名。山東省の英語名シャンタン Shantung は

山東絪（蘭絪）をも指す。

（40）表座敷　「堂隍」は「堂皇」あるいは「堂埠」であろう。本来「四壁の無い建物」だが、これでは意味が通じないので、ここでは「表座敷」とした。「堂」は屋敷の中央以南の平土間の広い場所だから。

（41）阮籍　二一〇―六三年。字は嗣宗。三国時代の魏の文人。いわゆる「竹林の七賢」の一人。同好の士は青眼で、礼教の士は白眼で迎えた、という。

（42）瞿佑　一三四一―一四二七年。字は宗吉、存斎と号す。浙江省銭塘の人。『剪刀録』四十巻を著すが、これは既に彼の生前に散逸してしまい、胡子昂という人物が内四巻を入手、当時瞿佑が流されていた陝西省保安にまで赴き、校閲してもらったのが世に残り、『剪刀新話』と称された、という。

（43）李禎　一三七六―一四五二年。字は昌祺。江西省廬陵の人。進士及第。高官を歴任。文人としても高名だったが、小説集『剪刀余話』を編んだので世人の評価が下落した、という。小説など官途に就いている知識人が手を染めるものではない、という一般常識があったのである。

（44）浅井了意　？―一六九一年。江戸前期の仮名草子作者。『剪刀新話』からの翻案十八編を含む怪奇小説集『伽婢子』を初めとし、『東海道名所記』、『新可笑記』などがある。父は俗称東本願寺（浄土真宗大谷派本山）末寺本照寺（摂津国三嶋江＝現高槻市）住職。父の弟、すなわち叔父の東本願寺からの出奔に連座して寺を追われた父ともども故郷を後にした。従ってその前半生は辛酸を嘗めたもののようである。寛永年間（一六二四―四四）末京都に移住、やがて出家、寛文年間（一六六一―七三）末年には本山に帰参が叶う。本照寺と同音の本性寺を紙寺号（名義のみの寺号）として本山から許された延宝三（一六七五）年以降、書名には本性寺昭儀坊了意を用いた。八十歳以上で世を終わったらしい。

（45）『狗張子』　元禄五（一六九二）年出版。

（46）「塩田平九郎怪異を見る」『怪談名作集』（日本名著全集第一期、江戸文芸之部第十巻、日本名著全集刊行会、昭和二）。

（47）関敬吾編著『日本昔話大成』　全十二巻（角川書店、昭和五四初版）。

（48）四回でなければ纏らない　前掲書「化け物問答」の類話では、「さいちくりんのけいさんぞく〔「さんぞくけい」の訛伝であろう〕」、「なんちのりぎょ」、「ほくざんびゃっこ」、「とうざんばこつ」が、「ちんほく内にか」と言って、山寺へやって来る。「西竹林の三足鶏」、「南池の鯉魚」、「北山白狐」、「東山馬骨」である。「ちんほく」と呼ばれる留守居役は墨壺と筆（矢立として一つの存在扱い）。「ちんほく」は勿論「椿木」なのだが、この話の語り手にはそれがなんだか分からなくなっており、矢立の名としたのだろう。

（49）「椿を信仰上の特別な木とみなすところから、これから道具を作ることを忌む地方も多い」　鈴木棠三著『日本俗信辞典　動植物編』（角川書店、昭和五七初版）。前掲書には「岡山県勝田郡では、椿の槌を使うことを戒める。ある時、椿の槌が夜鳴をしたことがあり、割ると血が出た、という」ともある。

（50）『宿直草』『江戸怪談集』上（岩波文庫、岩波書店、一九八九）所収。江戸初期の仮名草子の一つ。萩田安静著。開版延宝五（一六七七）年。

（51）などか古下駄も師走を待ちて踊らざらん　はて、古下駄がなぜ師走に踊るのか。世人が正月を迎えるため身の回りの品品を新調すると、古傘、古蓑、古合羽、古下駄のたぐいも掃き溜に棄てられるので、これを恨んで付喪神になり、怪異を示す、とでも言っているのだろうか。

（52）『百鬼夜行絵巻』　古い器物が付喪神（精怪）となる、との民間信仰を反映して、鎌倉末期から室町時代に至るまで、そうした器物の化け物を描いた絵巻が幾つも出た。現存するものに伝土佐光信筆、伝土佐経隆筆がある。